

2020年3月期 決算説明電話会議 質疑応答（サマリー）

日時：2020年5月15日（金） 15:15～16:30

説明者：取締役副社長 CFO 宮崎純一

決算資料：https://www.nissanchem.co.jp/ir_info/archive/cf/s2020_05_15.pdf

■ 全社

Q1. 今期（2021年3月期）の業績予想には新型コロナウイルス（COVID-19）影響を織り込んでいないとのことだが、前期（2020年3月期）の実績に影響はあったのか。また、今期ではどのような影響が予想されるのか、プラス・マイナス両方の要素について教えてほしい。

A1：前期の実績には、影響はほとんどありませんでした。今期は、経済活動全般へウィルス影響が出てくると考えられるので、化学品についてはマイナス影響を受けると見ております。機能性材料では、ディスプレイや半導体などは、テレワークの拡大などを受けてパソコン需要が増えておりますが、一方でスマートフォンの売上減などの話もありますので、プラス・マイナスは不透明な状況です。農業化学品は、国内についてはそれほど影響はないと考えていますが、輸出では一部マイナス影響が出ているところもあります。医薬品は、それほど影響はないと見ております。

Q2. 今期の予想には新型コロナウイルスの影響を織り込んでいないので、業績が下ぶれるリスクがある。その場合でも今期の増配は確実に実行するのか。

A2：配当は配当性向を基準として決めているので、業績によっては配当の下方修正もありえますが、前期の年間配当90円はひとつのベンチマークとして考えております。総還元性向で考えますと、自己株式取得は今の前提ですと追加で行うこととなりますが、ここは今後の業績次第です。

Q3. 決算資料 p73 の自己株式取得の過去推移を見ると、リーマンショックや東日本大震災の際は自己株式取得を見送っているが、今回はこのタイミングで自己株式取得を発表している。新型コロナウイルス影響に関しては、当時と比べて収益へのマイナス影響が小さいと判断しているのか。ウィルス影響により外部環境が変わってきている中で、スタンスを変えることなく自己株式取得の継続を決断した背景を教えてください。

A3：当社の現在の財務体力は、2009年や2011年と比較してまったく異なる水準にあります。当時、リバロは好調でしたが、フルララネルや光IPS向けのサンエバーはありませんでした。それに比べて、今期は、フルララネルが減収だとしても、製品全体の利益率は非常に高くなっています。また、当社は目標現預金残高水準を計算しており、現在の現預金残高300億円というのはかなり余裕のある水準です。これが、昔の状況と異なること

ろです。なお、株主還元のために設備投資や研究開発費をセーブしているわけではあり
ません。農業化学品では数十億円規模のインド合弁会社設立やクインテック事業買収を行
いましたが、さらに M&A も良い案件があればやっていきたいと思っています。

**Q4. 決算資料 p59 で、2023 年度に向けて売上高は 16%の増収を見ているが、営業利益は
どの程度の増益が見込まれるか。**

A4: 利益の数字までは作成しておりません。2023 年度の売上高イメージを公表すること
でお伝えしたかったメッセージは、2023 年度に向けて、フルララネルは減収、光 IPS 向け
サンエバーは横ばいであっても、全社的に見て増収の成長シナリオを持っているという
ことです。

**Q5. フルララネルや光 IPS 向けサンエバーは利益率が高いが、2023 年度に向けてそれら
が伸びないとなると、全体的に利益率は低下してしまうか。**

A5: 利益率は計算していないため何とも言えませんが、新しく入ってくる機能性材料など
の新製品群は利益率的には高いと思いますので、全社としての利益率にはそこまで変化
はないと見込んでおります。

■化学品セグメント

**Q6: 今期の業績予想では化学品セグメントの増益額が最も大きいですが、前期も大幅増益の予
想を出して、結果的に大きく下ぶれている。化学品の今期予想はどのような前提のもと作
られているのか。**

A6: 化学品の今期予想は、前期の 4Q (1-3 月) の状況が年度を通して継続するという前提
のもとに予想を立てています。前期 4Q は、メラミンは厳しい状況にある一方で、高純度
硫酸やテピックは回復基調にありました。また、今期はシアヌル酸の増設に伴う増益効果
が下期から加わる上に、硝酸製品では撤退する競合他社のマーケットを当社が獲得する
想定としています。

Q7: 足もとで原油安が進んでいるが、これは原料安に繋がるのでプラス要因か。

A7: 原油安はプラス要因になりえます。ただし、当社が実際に原料として使用しているの
は天然ガスであり、メリットの享受には 4 か月ほどのタイムラグがあります。

■機能性材料セグメント

**Q8: 前期はサンエバー全体が計画に対してかなり上ぶれており、また今期もサンエバー全
体で 4%の増収を見込んでいる。これらの背景を教えてください。**

A8: 前期のサンエバーの上ぶれは、光 IPS と VA が中心です。光 IPS はスマホを中心に上
ぶれ、非スマホ向けも好調でした。テレビ向けの VA も想定以上に伸びました。例年 4Q

(1-3月)は在庫調整の時期ではありますが、前期につきましては大きな調整もなく、顧客も稼働好調ということで、想定以上の実績となりました。今期につきましても、引き続き光 IPS の非スマホ向けでの拡大、また VA もテレビ向けでのさらなる拡大が見込めることから、サンエバーは伸長していくと見ております。

Q9：顧客サイドに在庫が積みあがっているわけではなく、順調に売り上げが伸びていくという理解でいいのか。

A9：その通りです。顧客の稼働は好調で、在庫も適正化されていると見ております。

Q10：光 IPS 向けサンエバーは今期増収予想となっているが、これをスマホ向けと非スマホ向けに分けた場合のイメージについて教えてほしい。また、2023 年度の売上高イメージ p61 では、スマホ向けが減収、非スマホ向けが増収となっている。この背景についても教えてほしい。

A10：今期は、スマホ向けはほぼ横ばいと見ており、増収は非スマホ向けによるものです。非スマホ向けは直近でも好調で、今期以降も成長が続くと見込んでおります。2023 年度では、タブレット PC で約 3 割、ノート PC で約 5 割が光 IPS にシフトする（数量ベース）と予測しており、非スマホ向けは大きな伸長を期待しております。一方でスマホ向けは大きく減収になると見ております。

Q11：今期はその他半導体材料で 35%の大幅増収を見ているが、背景を教えてほしい。

A11：主な増収の背景は、顧客の製造量増加に伴う使用量増加です。また、多層材料のシェアが、アジア向けなどで少し伸びる計画となっております。

■農業化学品セグメント

Q12：決算資料 p47 で、フルララネルの売上は 2022 年度まで下がる予想となっているが、競合剤の影響はあるのか。

A12：競合剤の影響はそこまで大きくないと見ています。2022 年度までの減収は在庫調整によるものです。

Q13：決算資料 p47 で、ブラベクトは順調に成長とあるが、ブラベクトが伸びるのであれば日産化学のロイヤリティ収入も伸びると考えられる。2022 年度までの減収は、ロイヤリティ収入の増収よりも原薬の減収が大きいという理解で問題ないか。

A13：その通りです。ロイヤリティは増収ですが、原薬の減収が大きくフルララネル全体では減収が継続すると見込んでいます。

以上